

# 養種園遺跡第2次 保春院前遺跡

発掘調査報告書

—都市計画道路「南小泉茂庭線」—  
関連遺跡調査報告書Ⅱ

2009年3月

仙台市教育委員会

# 養種園遺跡第2次 保春院前遺跡 発掘調査報告書

—都市計画道路「南小泉茂庭線」—  
関連遺跡調査報告書Ⅱ

2009年3月

仙台市教育委員会

## 序 文

日頃、仙台市の文化財保護行政に対しまして、ご理解、ご協力をいただき誠に感謝申し上げます。仙台市内には約800箇所の遺跡が現在確認されています。これらの遺跡は先人達の知恵と努力によって今まで伝えられてきたものであり、遺された貴重な文化遺産を保護し保存活用を図りつつ次の世代に継承していくことは、現代に生きる私達にとって大きな責務であると考えております。当教育委員会としましては皆様のご理解とご協力を得て、貴重な文化財を保存し後世に伝えるように努めているところであります。

さて、仙台市の東部に位置する南小泉周辺は市内でも遺跡が数多く分布しているところで、国史跡の遠見塚古墳をはじめとし、市内有数の規模を誇る南小泉遺跡、藩祖伊達政宗の晩年の居城となる岩林城跡など、各時代を代表する遺跡がみられます。今回の報告は、都市計画道路「南小泉茂庭線」の建設に先立ち調査を行った養種園遺跡と保春院前遺跡の調査成果をまとめたものです。弥生時代の上器棺墓をはじめとし、奈良時代から近世にわたる人々の生活の跡を発見しています。とりわけ、中世から近世の集落跡や屋敷跡の発見は南小泉地域周辺の歴史を考えるうえで貴重な発見と言えます。本書に掲載した調査成果が、地域の歴史の解明と文化財保護思想の高揚のために多少なりともお役に立てれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にご協力、ご指導いただきました多くの皆様や関係機関各位に心より感謝申し上げるとともに、文化財保護行政に対しまして、今後とも市民の皆様のご支援とご助言を賜りますようお願い申し上げ、刊行のご挨拶といたします。

平成21年3月

仙台市教育委員会  
教育長 荒井 崇

## 例　　言

- 本書は、都市計画道路「南小泉茂庭線」の建設工事に伴い、平成8年7月から平成14年10月にかけて実施した仙台市若林区南小泉・文化町、保春院前丁、六十人町に所在する養種園遺跡（第2次）及び保春院前遺跡の発掘調査の成果を収録したものである。
- 本書の執筆・編集は瀬部弘美が担当した。
- 陶磁器類の産地同定は文化財調査 佐藤洋が行った。
- 陶器類の同定に関して、井上喜久男氏、藤澤良祐氏、前川要氏、森村健一氏から御指摘・御助言をいただいた。
- 製鉄類に関して、赤沼英男氏、五十川伸矢氏、越田賢一郎氏から御指摘・御助言をいただいた。
- 陶磁器類の実測・写真の一部は国際航業株式会社（現 国際文化財株式会社）に委託した。
- 本書に関わる図面・写真・遺物等の資料は仙台市教育委員会が保管している。

## 凡　　例

- 本書中で使用した地形図は国土地理院発行の5万分の1「仙台」の一部を使用した。
- 本書中の上色の記述は『新版標準土色帳』（小山・竹原：1973）による。
- 図中の座標値は平面直角座標系Xでの値である。高さ表示は海拔標高値である。
- 遺構番号は確認年度で分け、種別毎に3桁表示とした。平成10年度（98年）は200番台、平成11年度（99年）は300番台、平成12年度（2000年）は400番台、平成14年度（2002年）は500番台とし、通し番号を付した。
- 出土遺物は下記の略号を使用し、登録番号を付している。

A : 鋼文土器	B : 弥生土器	C : 土師器	D : 土師質土器	E : 須恵器	F : 古代瓦
G : 近世瓦	H : 瓦質土器	I : 陶器	J : 磁器	K : 石器・石製品・礫石器	
L : 木器・木製品	N : 金属製品	P : 土製品	R : その他		
- 上師器の実測図で内面の網は黒色処理を表している。
- 掘立柱建物跡及び柱列の柱間は柱痕跡の芯々間で計測したが、未確認時には柱穴底面の凹面ないし柱穴中央部で計測している。

# 目 次

序文

例言

凡例

I	養種園遺跡・保春院前遺跡調査の概要	1				
1	調査に至る経緯	1				
(1) 調査に至る経緯	(2) 調査要項					
2	遺跡の立地と環境	1				
(1) 地理的環境	(2) 歴史的環境					
II	調査の成果	7				
1	中央調査区	7				
(1) 98年調査区		7				
1) 建物跡	2) 柱穴・ピット	3) 溝跡	4) 積穴跡	5) 土坑	6) 土器棺墓	
(2) 2000-2区の調査						59
1) 溝跡	2) 土坑					
(3) 2000-3区の調査						62
1) 溝跡						
(4) 2000-4区の調査						64
1) 溝跡	2) 土坑					
(5) 小結						65
2	西側東調査区	72				
(1) 99-1区の調査						72
1) 建物跡	2) 柱列跡	3) 土坑	4) 溝跡	5) 積穴跡		
(2) 2000-1区の調査						80
1) 溝跡	2) 土坑					
(3) 99-2区の調査						84
1) 土坑	2) 溝跡					
(4) 2002-2区の調査						85
1) 建物跡	2) 柱列跡	3) 土坑	4) 溝跡	5) 積穴跡		
(5) 小結						103
3	西側西調査区	107				
(1) 99-3区の調査						107
1) 柱穴・ピット	2) 土坑	3) 溝跡	4) 積跡	5) 積穴跡		
(2) 2002-1区の調査						132
1) 土坑	2) 溝跡	3) 石敷造構				

(3) 99-4区の調査.....	146
1) 遺物跡    2) 土坑    3) 溝跡    4) 竪穴跡	
(4) 小結.....	178
4 東側調査区.....	180
(1) 2000-5・8区の調査.....	180
1) 竪穴跡    2) 炉跡    3) 土坑    4) 溝跡    5) 柱穴・ピット	
(2) 小結.....	189
 III まとめ.....	189
1 遺構の構成.....	190
2 まとめ.....	190
 IV 同定・分析.....	191
養種園遺跡・保春院前遺跡出土の金属類分析.....	191
養種園遺跡・保春院前遺跡より出土した木製品の樹種.....	212
 写真図版	
遺構写真	
遺物写真	
報告書抄録	

# I 養種園遺跡第2次・保春院前遺跡調査の概要

## 1. 調査に至る経緯

### (1) 調査に至る経過

仙台市では、交通網の整備として各地区で都市計画道路の建設・整備が進められているが、当調査もこの一環で実施に至ったものである。南小泉茂庭線として、JR貨物線の西側の若林区六十人町から南小泉二丁目の宮城萩大通までの約900m区間が建設工事地となり調査対象地となる。道路計画自体は古くから立案されており地域住民を含め懸案の路線であった。路線上には南小泉遺跡、養種園遺跡が位置しており、これまでの調査で縦文時代から近世にいたる遺構及び遺物が確認されている。年次計画のもと2遺跡の調査を進めたが、南小泉遺跡分に関しては第28次発掘調査報告書として刊行しているので参照されたい。平成8年度に養種園遺跡東側（中央調査区地）の確認調査を実施し、柱穴・幅広の溝跡・土器棺墓等を確認した。植木穴が数多く掘られ擾乱坑が散見されたが遺存状況は全体的に良好であった。平成10年度から本格的な調査に入ったが、JR貨物線の西側へ遺構群が広がることが確認され、平成11年度に遺跡範囲の拡大を行っている。さらに七郷堀の西側でも遺構・遺物が発見され、新規の遺跡として保春院前遺跡を登録している。平成14年度に調査を終了した。

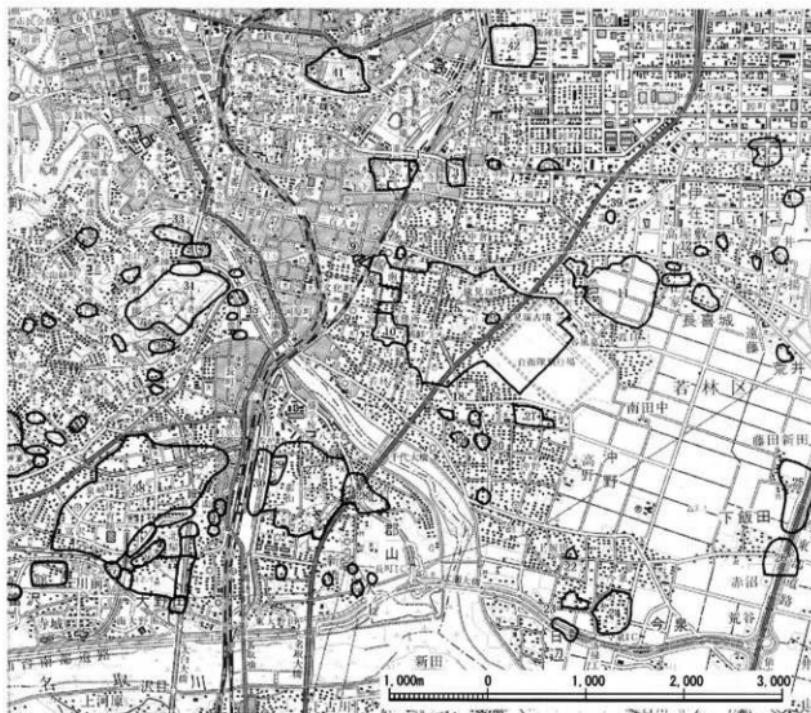
### (2) 調査要項

- 1 遺跡名称 養種園遺跡（宮城県遺跡地名表記載番号01349）  
保春院前遺跡（宮城県遺跡地名表記載番号01555）
- 2 調査地点 仙台市若林区南小泉一丁目、文化町地内 仙台市若林区保春院前丁、六十人町地内
- 3 調査理由 都市計画道路「南小泉茂庭線」建設工事
- 4 調査主体 仙台市教育委員会
- 5 調査担当 仙台市教育委員会生涯学習部文化財課  
担当職員 平成8年度(96年) 主任 渡部弘美 文化財教諭 三塚 靖（確認調査）  
平成10年度(98年) 主任 渡部弘美 文化財教諭 伊東真文 文化財教諭 松本知彦  
平成11年度(99年) 主任 渡部弘美 文化財教諭 伊東真文  
平成12年度(2000年) 主任 渡部弘美 文化財教諭 伊東真文  
平成14年度(2002年) 主任 渡部弘美 文化財教諭 三塚博之
- 6 調査期間 平成8年度(96年) 平成8年7月29日～8月28日  
平成10年度(98年) 平成10年6月10日～平成11年3月8日  
平成11年度(99年) 平成11年4月12日～8月12日  
平成12年度(2000年) 平成12年7月17日～10月11日  
平成14年度(2002年) 平成14年6月3日～10月18日
- 7 調査面積 養種園遺跡 約4,630m<sup>2</sup>（調査対象面積約10,400m<sup>2</sup>）  
保春院前遺跡 約837m<sup>2</sup>（調査対象面積約1,600m<sup>2</sup>）

## 2. 遺跡の立地と環境

### (1) 地理的環境

養種園・保春院前遺跡はJR仙台駅の南東約2.5kmの地点、若林区南小泉一丁目、保春院前丁に所在する。市内最大規模をもつ南小泉遺跡の北西端に位置し、伊達政宗晩年の居城となる若林城は南方約500mの地点に位置する。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	円分中央道跡	集落跡	自然堤防	古代・中世・近世	22	高田八幡宮	城郭跡	自然堤防	古墳・古代
2	陸奥國分寺跡	寺院跡	自然堤防	古代・中世	23	高田八幡宮	河川堤・水田跡	既青面地	鐵文・近世
3	陸奥國分寺守御所跡	寺院跡	自然堤防	古代	24	今宗遺跡	聚落跡・試掘跡	自然堤防	鐵文・近世
4	志波城跡	城郭跡	自然堤防	古代	25	高田山遺跡	山麓・水田跡	城場	共生・古代
5	南小国道路	集落跡地	自然堤防	鐵文・近世	26	下原田遺跡	山麓・坡地跡	城場	古墳・中世
6	蓬生西遺跡	後方施設内構	自然堤防	古墳	27	喜山遺跡	宝篋印塔・寺社跡	自然堤防	鐵文・古代
7	法輪寺古墳	古墳	自然堤防	古墳	28	北百城跡	城郭跡	自然堤防	鐵文・近世
⑨	蓬生城跡	集落跡地	自然堤防	鐵文・近世	29	西台御跡	先秦晉	自然堤防	鐵文・古代
⑩	保佐町前原跡	集落跡地	自然堤防	古代・中世・近世	30	真田家来遺跡	先秦晉	自然堤防	鐵文・古代
10	若林城跡	城郭跡	自然堤防	古墳・近世	31	段々崎跡	城郭跡	丘陵	中世
11	仙台東港魚問屋跡	集落跡	後方施設	古代	32	大年寺山根穴六幕群	礫六幕	丘陵	古墳・古代
12	中在東港跡	兵合跡	自然堤防	古代	33	愛宕山根穴六幕群	礫六幕	丘陵・台地	古墳・古代
13	中在東港遺跡	前川跡・水田跡	後方施設	弥生・近世	34	宗神寺山根穴六幕群	礫六幕	丘陵	古墳・古代
14	長高城跡	城郭跡	自然堤防	中世	35	聖母古墳	南北向円頂	自然堤防	古墳
15	萬葉御跡	聚落跡	自然堤防	古墳・古代	36	度ヶ崎根穴六幕群	礫六幕	丘陵	古墳・古代
16	押口遺跡	前川跡・水田跡	後方施設	弥生・近世	37	二ツ沢根穴六幕群	礫六幕	丘陵	古墳・古代
17	御橋遺跡	官道?	自然堤防	古代	38	宮尻遺跡	水田跡	自然堤防・後者墓地	鉄石器・近世
18	御押口遺跡	城郭跡	自然堤防	古代・古代	39	青司指明神古墳	円頂	自然堤防	古墳
19	砂押口遺跡	城郭跡	自然堤防	古代・古代	40	舟頭遺跡	城郭跡	自然堤防	中世
20	半田西遺跡	城郭跡	自然堤防	共生・古代	41	圓分縫面跡	城郭跡	段丘	中世
21	神野城跡	城郭跡	自然堤防	中世	42	舟日御跡	城郭跡	自然堤防	中世

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

広瀬川の愛宕堰付近から取水され東流する七郷堀が養種園遺跡の北側で高砂堀・仙台堀として分岐し北と東へ流れている。当遺跡が位置する仙台市東部は「宮城野海岸平野」に区分され、北は宮城郡七ヶ浜町から南は亘理郡山元町まで約40kmにわたって広がりをみせている。南方3kmの地点では広瀬川と名取川の合流点がみられ、両河川周辺には自然堤防・後背湿地が発達し旧河道も観察される。当遺跡は自然堤防上に立地し、標高は12~14mである。

## (2) 歴史的環境

南小泉遺跡第28次調査の報告文で述べており参照されたい。ここでは概略を述べるにとどめる。

### 〔縄文時代〕

当地区で縄文時代の遺跡として確認されるのは養種園遺跡と南小泉遺跡の2遺跡である。南小泉17次・19次調査では土器や石器が少量出土しており、養種園1次調査・南小泉28次調査では縄文時代前期前業の纖維土器が下層の黒色粘土層から発見され、今回調査の養種園遺跡では黒色粘土層よりも上位の黄褐色土シルト層から後期・晩期の遺物が出土しており注意される。各調査とも遺構は確認されていない。

### 〔弥生時代〕

当時代の遺跡として確認されるのは縄文時代同様に養種園遺跡と南小泉遺跡のみである。南小泉遺跡では昭和14~16年の飛行場拡張工事の際に、大量の土器と石器が出土し、合口土器棺が15組確認されている。住居跡の発見こそないが、南小泉遺跡は弥生時代中期を主体とする集落遺跡の存在が窺われる。今回調査の養種園遺跡でも土器棺墓が確認されている。

### 〔古墳時代〕

周辺地域には遠見塚古墳・法領塚古墳・猫塚古墳の高塚の古墳が分布し、若林城内古墳のように上部が削平されたものもある。遠見塚古墳は4世紀末に築造された主軸110mを測る東北地方を代表する前方後円墳である。昭和50年から62年かけて環境整備に伴う調査が行われた。主体部は後円部に一辺約11mの排水施設をもつ方形の土坑内に南北方向に2基の削竹形木棺が埋設されていた。副葬品として碧玉製管玉・ガラス玉・竹製黒漆塗り堅拂が出土している。周溝や周溝外側の自然流路からは祭祀に使用された土師器・須恵器・石製模造品が発見されている。4世紀中頃から7世紀にまでおよぶ遺物群で長期間に渡る祭祀が確認される。法領塚古墳は直径32m、高さ6mを測る円墳である。横穴式石室が確認され7世紀前半頃の築造である。青銅器製品・鉄製品・土師器・須恵器が出土している。若林城内古墳は推定直徑22m程の円墳である。周溝底面・堆積土から円筒埴輪が多量に出土している。大野田古墳群や夷町古墳から出土する円筒埴輪に類似し5世紀後半から6世紀初頭頃の年代が考えられる。

集落跡の様相は各次調査で徐々に明らかとなってきている。前期の遺構は発見例が少なく、南小泉20次調査で堅穴住居跡が1軒確認されるのみである。中期になると、遠見塚古墳を囲むように広い範囲に住居跡群が確認される。南小泉12次調査ではカマドが設置されない住居跡が確認され、炉からカマドへの移行期が確認されている。南小泉16次調査では石製模造品の製作工房と考えられる住居跡や粘土溜めをもつ堅穴遺構が確認され、集落内の生産を担った地点と考えられている。南小泉17次・30次調査では中期から後期にかけての遺構が密集しており、30次調査では住居跡が21軒確認され集落の中心と考えられている。

### 〔飛鳥時代〕

養種園遺跡の南西2kmの地点、広瀬川右岸に都山遺跡（官衙）が造営される。官衙跡は2期（I・II期）に区分され、I期官衙が7世紀半ば～7世紀末、II期官衙が7世紀末～8世紀初頭の時期となる。I期官衙の規模は南北600m・東西400m程の範囲となり、大規模な掘立柱建物跡や柱柱の建物跡群、掘立柱建物跡と堅穴建物跡とが共存する地点など各ブロックに分かれ構成されている。規模や遺構等から城柵と考えられている。II期官衙はI期官衙とほぼ同位置に造営される。規模は方四町（428m）となり造営基準方向は真北となる。一町隔てた南側には寺院が付属する。材木列跡や大溝跡が四方を巡り、南辺中央では南門、南半部では中権の建物跡群が確認されている。II

期官衙は多賀城以前の国府と考えられている。南小泉22次調査では当時期の集落跡が確認されている。関東系土器が一定量出土しており、移民に関わる集落の可能性が指摘されている。

#### 〔奈良時代〕

陸奥国分寺は昭和30年～34年にかけて学術調査が実施され、昭和47年からは史跡公園の環境整備として調査が進められている。東西800尺（242m）、南北は北辺が不明となるが800尺以上、桑地帯で囲まれた大規模な寺院であることが判明している。伽藍配置は法起寺と同じで中軸線上に南大門、中門、金堂、講堂、僧坊と並び、金堂の東には回廊の巡る七重塔が配される。大量の瓦が出土しており、「柴」・「行」・「櫻」・「会」など陸奥国の郡名を記した刻印瓦なども出土している。陸奥国分尼寺は昭和39年に調査が行われ「観音塚」と呼ばれる土壇状の高まりから礎石立の建物跡が確認されている。やや規模が小さい建物跡であるが金堂跡と考えられている。平成8年・13年の調査で金堂跡北側で大規模な掘立柱建物跡が確認された。伽藍配置等から尼坊跡と考えられている。建物跡は金堂と尼坊のみにとどまっており、全体像については未だ不明な点が多い。

南小泉地区では仙台東郊条里跡と呼ばれる真北を基準とする土地割りがみられた。現在は圃場整備等で現況は失われているが、二ノ坪・三の坪・尼ノ坪など条里に関わる地名が残っている。隣接する神輿遺跡では堀跡や塹跡の方向が条里型土地割りと一致し、8世紀中頃には条里制が施行されていた可能性が考えられている。当時の集落の様相は不明な点が多く、養種園1次・南小泉2次調査で数多くの住居跡が確認されている。瓦が出土する住居跡もあり、北方に位置する陸奥国分寺・尼寺に関わる集落の可能性も考えられる。

#### 〔平安時代〕

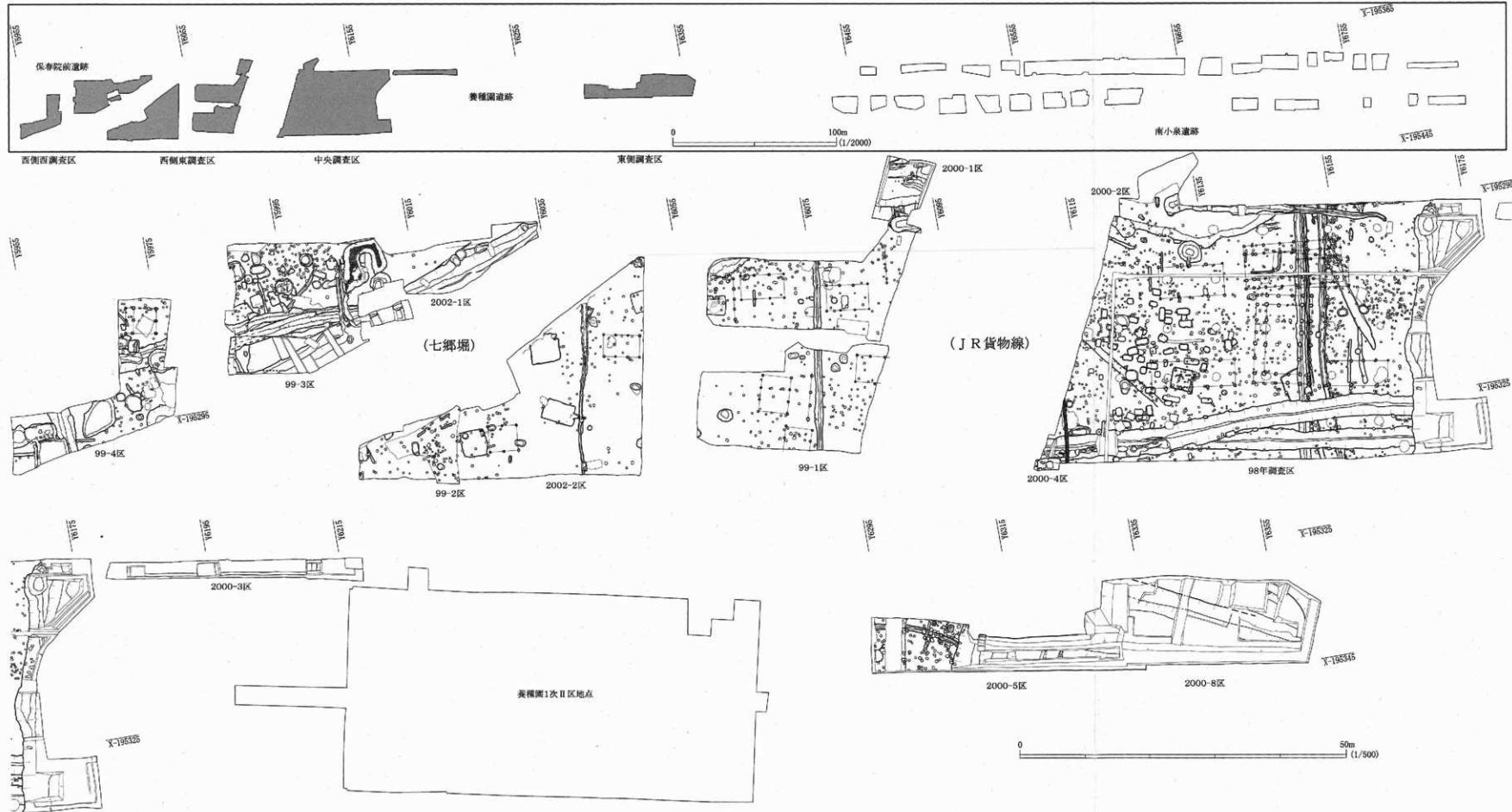
南小泉遺跡中央部～西部にかけての広い範囲で9世紀代を中心とする住居跡群が散在的に確認される。古墳時代中期の集落跡が東側で数多く確認されるのと対照的である。南小泉6次調査では床面積60m<sup>2</sup>となる極めて大型の住居跡が確認され、大量の墨書き土器の出土、石製の巡方の存在、一般集落とは性格を異にすると考えられる。若林城周辺の調査（南小泉4次・6次・7次・9次・11次調査）では30軒以上の住居跡が確認され、周辺地域が平安時代前半頃の中心域と考えられる。11～12世紀後半にかけては造構の発見例が激減し様相が不明となる。住居形態の変化や土器から木器への変容が一因と考えられている。

#### 〔中世・戦国時代〕

南小泉4次調査で初めて中世の造構（15世紀頃の屋敷跡）が確認され、南小泉17次調査では12世紀後半頃の原始的な中世の屋敷が確認されている。南小泉16次調査では14世紀後半頃の巨大な堀と土堤が巡り、大規模な館に発展している。戦国時代の宮城県は北に葛西氏と大崎氏、南に伊達氏という勢力構造となる。留守氏、栗野氏などの小規模な国人領主が割拠し、南小泉周辺を含む宮城郡西部は国分氏の統治領となる。15世紀末～17世紀初頭にかけて養種園遺跡地内に大規模な造構群が出現する（養種園1・2次調査）。これらの造構群は規模等から家臣クラスの居住地と考えられており、若林城跡ないしそれに隣接する地点に存在が推察される国分氏居城の小泉城下町として考えられている。北方に位置する陸奥国分寺南側には国分町という市町が存在しており、一連の城下町を形成していたものと考えられる。

#### 〔近世〕

慶長5年（1600）に伊達政宗は青葉山の地に拠張りを行い、仙台城の築城を開始する。寛永4年（1627）、政宗は「屋敷」新築の願いが許可され若林城の造営に着手する。城下範囲は東西2.5km・東西1.5km程とみられ、若林城周辺の町並みは城下町の町割りを基本的に踏襲している。政宗の死去にともない若林城は解体されたが、養種園遺跡地内に二代藩主忠宗が「御仮屋」を、四代藩主綱村が「別荘」を造営する。南小泉28次調査では若林城下町期の土坑が確認され、養種園1次調査では御仮屋に付属する溝跡・上坑、別荘の堀跡等が確認されている。



第2図 調査区全体図

